



チベット仏教におけるジェンダー間の平等を求めて ーダライ・ラマ、西洋人比丘尼、国際サンガと研究者

伊藤, 友美

(Citation)

宗教と社会, 14:87-105

(Issue Date)

2008-06-14

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001042>



展望

チベット仏教におけるジェンダー間の平等を求めて —ダライ・ラマ、西洋人比丘尼、国際サンガと研究者—

伊藤友美

2007年7月18-20日、ドイツのハンブルク大学において、The First International Congress on Buddhist Women's Role in the Sangha, Bhikshuni Vinaya and Ordination Lineages (サンガにおける仏教徒女性の役割・比丘尼律・戒脈に関する第1回国際会議。以下、本稿ではこの会議を「ハンブルク会議」と呼ぶ)が開催された。本会議の主要な目的は、従来のチベット仏教には継承されていなかった比丘尼(すなわち具足戒を備えた女性出家者)からなるサンガ(僧団)導入の可否を検討することにあった。この問題について検討するため、世界各国から著名な仏教研究者および仏教各派において比丘尼を支援する比丘・比丘尼の両方が招待され、2日間にわたって研究成果報告と討論が行われた。そして、最終日にはチベット仏教の最高指導者であるダライ・ラマ14世(以下、本稿ではダライ・ラマ14世を「ダライ・ラマ」と呼ぶ)を招き、その判断を仰いだ。この会議は、研究報告者の大部分が学術機関に席を置く研究者であり、かつそれぞれが専門とする分野についての研究成果を報告したという点では、一定の学術性を備えていた。同時に、これらの研究成果をもとに、ダライ・ラマに対して、男性と対等な女性の宗教的権利の認定を求めたという点では、社会運動としての性格を併せ持っていた。とりわけ後者の点では、過去20-30年にわたって行われてきた仏教におけるジェンダー間格差是正運動が一つの盛り上がりを見せた会議として、注目に値する会議であった。筆者は、現代タイにおける比丘尼復興運動について研究報告を行うため、報告者の一人として、この会議に参加した⁽¹⁾。

1. 背景

仏教サンガは、インドからアジア各地に拡大し、それぞれの地域で独自の発展を遂げてきた。そのいずれにおいても、男性出家者集団である比丘サンガを中心として展開してきた。今日まで継承されてきた多様な仏教サンガのうち、中国・台湾・韓国・ベトナムなどの東アジアの仏教には、女

性出家者集団である比丘尼サンガが伝えられている。他方、上座部仏教が実践されてきたスリランカ・東南アジア地域、そして密教の伝統を受け継ぐチベット・ブータンなどのヒマラヤ山脈地域からモンゴルにかけての地域では、比丘尼サンガが欠如した状態が続いてきた⁽²⁾。上座部仏教・チベット仏教における比丘尼サンガの欠如は、単に男性のみが比丘として完全な出家をすることが可能であり、女性が同等の比丘尼として出家することが不可能であるということだけを意味するものではなかった。女性にとって出家者としての地位が欠如していることは、その他の宗教的機会の欠如を伴っていた。男性が具足戒を受けて比丘になると、在家仏教徒から高い尊敬と潤沢な経済的支援を受け、修行や教理学習に専念できるのに対し、女性はこれらすべての面において男性と同等の機会が与えられなかった。アジアの女性仏教徒の多くは、こうした仏教におけるジェンダー間不平等を所与の伝統として受け止めてきたといえる。

いわゆるウーマン・リブの時代を経験した欧米人女性たちが仏教に強い関心を寄せるようになると、上座部仏教・チベット仏教における比丘尼サンガ・女性の出家機会の欠如は、伝統宗教における女性差別として強い批判にさらされるようになった。西洋人女性仏教徒たちは、1960年代以降の女性運動によって、西洋社会のジェンダー間関係がより対等なものへと大きく変化してきたことを実感していたため、女性の地位向上に向けた社会運動に高い意欲を持っていた。彼女たちは、比丘尼サンガの復興ないし導入は、仏教におけるジェンダー間平等の実現に不可欠なものと考え、女性も比丘尼になることによって、男性の比丘と対等な宗教的地位や機会を享受するべきであると社会に訴えるようになった⁽³⁾。

やがて、上座部仏教・チベット仏教に帰依する西洋人女性の中には、比丘尼サンガが継承されてきた韓国・台湾・香港など東アジア仏教のサンガから具足戒を受戒し、上座部ないしチベット仏教の比丘と同じ僧衣を着用して、比丘尼として宗教活動を行う人々が現れた。1980年代末、こうした西洋人女性仏教徒が媒介となって、仏教諸派を横断するグローバルなネットワーク、Sakyadhita International Association of Buddhist Womenが成立した⁽⁴⁾。Sakyadhita 協会は、ほぼ2年に1度の頻度で国際会議を開催し、比丘尼サンガが現代に継承されていない仏教諸派において比丘尼サンガを復興することを目標の一つとして、世界各地の女性仏教徒に意見

交換の場を提供している。

Sakyadhita 協会の活動は、アジアの女性仏教徒にも刺激を与えた。その結果、スリランカ上座部仏教においては、比丘尼サンガの復興が実現し、現地社会に定着しつつある⁽⁵⁾。しかし、これまでのところ、タイ、ビルマ、チベットなどの国でそれぞれの国の宗教的権威とされる比丘サンガの組織は、系統の異なる韓国・台湾などのいわゆる大乘仏教のサンガ（戒脈としては法蔵部 Dharmaguptaka School の四分律 Dharmaguptaka Vinaya を継承）から具足戒を受戒した女性たちを、自国の伝統的なサンガに属する比丘尼として認定していない⁽⁶⁾。それ故、比丘尼復興運動の現在の目標は、各国の伝統サンガの全面的支援に裏打ちされた比丘尼サンガの確立なのである。

香港・台湾・韓国などのサンガから具足戒を受けて比丘尼となりチベット仏教を実践する尼僧たちは、ダライ・ラマに対して、チベット仏教における比丘尼サンガの創設を訴え、20年以上にわたって交渉を重ねて来た。ダライ・ラマは、チベット仏教における比丘尼律の戒脈の復興に対して否定的なチベット仏教の高僧らに配慮し、「自分が独裁者として（チベット仏教における比丘尼復興を）決定することはできない」としながらも、仏教における男女平等な宗教教育・実践・出家の機会について、深い理解と共感を示してきた⁽⁷⁾。ハンブルク会議主催者の説明によると、1987年、ダライ・ラマは尼僧を比丘尼として出家させないという現在のチベット仏教の慣行は、ブッダの時代の慣行に反するとして検討を要請した。これを受けて、チベット亡命政府が存在するインド・ダラムサラのチベット宗教文化局は、この問題について広範な研究を重ねた⁽⁸⁾。そして、ダライ・ラマは、2005年8月、スイスで開催された Conference on Tibetan Buddhism in Europe（ヨーロッパにおけるチベット仏教会議）に臨席した際、チベット仏教における比丘尼律の復興のために、5万スイス・フラン（約500万円）の資金を提供し、西洋人の尼僧たちが中心となってアジア仏教国の仏教指導者との意見交換を行い、この件に関する研究を深めるよう提案した⁽⁹⁾。ダライ・ラマによる資金を元に、ドイツ人のチベット仏教の比丘尼 Jampa Tsedroen を中心とした The Committee of Western Bhikkhunis（西洋人比丘尼委員会）によって準備が重ねられ、今回のハンブルク会議が実現した⁽¹⁰⁾。

2. ハンブルク会議における研究報告・討論

今回のハンブルク会議では、チベット仏教の伝統サンガの一部をなす比丘尼サンガの創設を求めて、アジア・西洋から出家・在家の仏教学者とこれまで比丘尼復興のための運動・儀礼執行などにかかわってきた比丘、比丘尼、在家の支援者ら約 60 名が招待された。会議の第 1・2 日目には、集中的な研究発表が行われた。研究発表のセッションには、チベット仏教に限らず、原始仏教における比丘尼サンガの設立、現存する仏教諸派における比丘尼出家の制度と手続き、比丘尼サンガ・比丘尼律の戒脈に関する歴史、伝統と現代的要請の間のせめぎあい、現代スリランカ・ビルマ・タイなど上座部仏教国における経験、現代中国・ベトナム・チベットなど広義の大乗仏教国における経験に関するパネルが設けられ、比丘尼出家全般にわたる内容が盛り込まれていた。仏教諸派が継承する経典、とりわけ比丘尼律（女性が出家の際に継受しその後の僧院生活における生活規範とするもの）について集中的に検討がなされた。

律の規定によれば、比丘尼になるための受戒儀礼は、比丘サンガ・比丘尼サンガの両方が執行しなければならないとされている。それ故、受戒儀礼に携わる比丘尼の師が存在しない場合、比丘尼サンガを復興することが不可能であると断定できるのかについて問い直すことが必要となる。チベット仏教における比丘尼サンガ創設の方法として、主として次の 2 つの可能性が検討された。

第一の方法は、律の規定に従って、比丘サンガと比丘尼サンガの両方による受戒儀礼を実現するため、今日まで比丘尼律の戒脈を継承している台湾や韓国などのサンガによって具足戒を受戒し、比丘尼となった上で、チベット仏教を實踐するというものである。この場合、台湾・韓国などのいわゆる大乗仏教のサンガとチベット仏教のサンガに継承されている律が異なっている点が問題になる。台湾や韓国のサンガは四分律 (Dharmaguptaka Vinaya) に従っており、他方、チベットのサンガは根本説一切有部律 (Mūlasarvāstivāda Vinaya) を用いている。四分律の比丘尼律と根本説一切有部律の比丘尼律は、わずかではあるが戒律の数や項目が異なっていることが知られている⁽¹¹⁾。四分律の比丘尼律がそれを実践する比丘尼サンガによって受け継がれてきたのに対し、根本説一切有部律の

比丘尼律はチベットの女性によって実践されることなく、テキストのみが伝わっている。

第二の方法として、新参比丘尼となる女性は、比丘サンガと比丘尼サンガの両方の戒師によって受戒するのではなく、ブッダの時代に最初の比丘尼が誕生したときのように、比丘サンガの戒師のみによって受戒するという方法である。この場合、律に定式化された受戒方法に沿うことにはならないので、この方法による受戒がチベット・サンガのメンバーになるための「正当」な手段であることをチベット・サンガが了承することが不可欠となる。

これらの点については、比丘尼出家を志す女性たち個人によって、また Sakyadhita 会議等においても、すでに繰り返し研究され、成果報告がなされてきた。上述二つのいずれの手段によっても比丘尼出家は可能であるという判断に基づき、ハンブルク会議を主催した西洋人比丘尼委員会の女性たちも、スリランカの上座部比丘尼たちも、すでに比丘尼出家を実現している。この会議の課題は、これらの手段による比丘尼出家が「正当」であることをチベットの伝統サンガに説得することであった。報告者の中には、現代の女性が比丘尼出家の制度を持つことを許されていないのは、律の問題ではなく、政治的判断の問題である、という趣旨の発言を行い、会議参加者の喝采を浴びた報告者も存在した⁽¹²⁾。第1日目・第2日目を通じ、いずれの報告においても、比丘尼サンガの復興を否定的に捕らえる見解が述べられることはなく、比丘尼サンガ復興、比丘尼律の戒脈継承・再導入が可能であることが、「学術的研究」によって、改めて確認された形となった。会議は、主催者の意図に適い、残すはグライ・ラマによる比丘尼サンガ復興を決定する声明を待つのみであるかのように思われた。

波紋が生じたのは、第2日目の報告後の、午後7時以降のセッションでのことであった。このセッションでは、本来企画されていた第2日目の報告についての質疑応答がキャンセルされ、会議参加者による全体討論が行われた。この場において初めて発表者以外の一般参加者が発言の機会を得ることになった。参加者の中には、主催者側が招待したチベット人の尼僧たちだけでなく、チベット・サンガにおける比丘尼復興の問題に関心を寄せて自ら参加を申し込んだチベット人の尼僧たちも数多く含まれていた。このセッションにおいて事実上の司会・進行を勤めたチベット学者 Janet

Gyatso の呼びかけによって、会議に参加しているチベット人尼僧自身が比丘尼出家についてどのように考えているのか、意見を表明できる場が設けられた。この全体討論の場を与えられて、初めてチベット人尼僧が挙手し、チベット語・英語の通訳を介して、自分の考えを述べる機会を得ることになった。その中には、比丘尼出家を真摯に受け止めようとする意見もあれば、「自分たちには足りないものだらけで、比丘尼出家以前にまずは日々胃袋を満たしたい」といった意見も述べられた。その結果、チベット人尼僧たちが必ずしも一致して比丘尼出家を求めているのではないことが次第に浮き彫りにされた。

翌日にダライ・ラマを迎えようとする段階になって、チベット人尼僧による否定的・消極的発言を受け、主催者側にも、比丘尼サンガ復興を支援してきた参加者の中にも、困惑が広がった。会議開催の中心となった Jampa Tsedroen の応答を聞く限り、比丘尼サンガの復興はチベット人尼僧にとって利益になることであり、当然、彼女たちから支持があるはずなのに、なぜ彼女たちがこの機会を前向きに捉えていないのか、理解に苦しむようにも見受けられた。スリランカの比丘尼サンガ復興を熱心に支援してきたスリランカ人の女性は、「今まで努力を重ねてきて、やっとここまで来たのに、あの尼僧たちは未だにこんなことを言っているのか。スリランカでも、かつてはダサシーラマターの中には同じようなことを言うものがいて苦労した」とひそかに漏らした。

西洋人比丘尼委員会の Jampa Tsedroen や Karma Lekshe Tsomo らは、比丘尼サンガ復興の手段として、翌日ハンブルク入りするダライ・ラマに対して提案する選択肢を絞り込むため、チベット語を交えつつ、会場全体に対して、重ねて説明を行った⁽¹³⁾。しかし、総合討論は、西洋人比丘尼委員会のメンバーが提案したいいずれかの選択肢を選択する方向に議論が展開せず、最後まで一致した結論に落ち着くことはなかったという。結局、深夜 12 時近くになり、会場のホールを施錠するというハンブルク大学警備員の要請によって総合討論は散会を余儀なくされた。

3. 会議最終日のダライ・ラマ声明

第 3 日目には、ハンブルク大学内の、より大きなホールに会場を移し、

第1・2日目の報告者・参加者以外の聴衆も加わって、ダライ・ラマの講演とダライ・ラマを交えたパネル・ディスカッションが行われた。第1・2日目の参加者は、主催者側から手荷物を持参しないよう事前の指示を受けており、来場した聴衆は、全員、保安検査を受けたのちに、ホールに着席した。警備員が見守る中、ダライ・ラマは弟子の比丘と西洋人の男性を伴って舞台脇の入り口からにこやかに登場し、あたかも聴衆の中に旧知の顔を探すかのように、額に手をかざして辺りを見回し、聴衆の中に暖かい笑いの渦を巻き起こした。午前部の部では、歓迎の辞と、ドイツのルター派キリスト教会で最初の女性 Bishop となった Maria Jepsen による講演の後、聴衆の期待が高まる中、ダライ・ラマが演壇に登った。しかし、ダライ・ラマは、宗教における女性の役割について、わずかに言及しながらも、比丘尼出家など、今回の会議における核心的問題にはまったく触れないまま、午前部の講演を終え、聴衆の期待は午後部に持ち越す形となった。

午後のパネル・ディスカッションでは、中央にダライ・ラマ（そしてダライ・ラマのやや後方の座席に同伴の西洋人男性とチベット人の弟子の比丘が着席。ダライ・ラマの英語講演を補佐する役割を担う）と司会の Dr. Thea Mohr、舞台に向かって左手には9名の比丘、右手には9名の比丘尼の代表が着席した。壇上に登った比丘・比丘尼は、えんじ色、灰色、黄土色、オレンジ色などさまざまな衣をまとった、チベット、西洋、ベトナム、台湾、韓国、スリランカ、タイ出身の僧尼であり、まさしく国際サンガの様相を呈していた。パネル・ディスカッションは、まず中央のダライ・ラマに近い位置に着席している比丘から末席の比丘へ、そして中央の比丘尼から末席の比丘尼へと順に、チベット仏教における比丘尼サンガの創設を求めるスピーチが繰り返された。ダライ・ラマはうつむき加減にそれぞれのスピーチを聞き、全員のスピーチを聞き終えた後に、初めて自身の見解について、慎重に言葉を選びながら語り始めた。このときのダライ・ラマの言葉を要約すると、次のようになる。

ダライ・ラマ自身は、すでに30・40年にわたってチベット仏教における比丘尼サンガの問題に関心を寄せてきた。数年前、スイスの会議で、数名の比丘尼にチベット比丘尼サンガ創設の検討を託し、彼女たちが仏教国の兄弟・姉妹と連絡するための費用を提供した。これまで、このような会議をもつことを夢見ており、こうして仏教諸伝統からの支持を得て、ここに

実現できたことをたいへん嬉しく思っている。ここに集まった我々は、中国仏教の伝統に従って受戒したチベット仏教の尼僧たちを比丘尼として受け入れているけれども、チベットの比丘たちは誰も彼女たちを比丘尼として受け入れようとしない。もし（仏教の祖であるゴータマ・）ブッダが存命しているならば、我々はブッダに比丘尼サンガの再興を求めることができるが、ブッダがここにはいないために問題が生じている。もし私（ドライ・ラマ）がブッダであれば、これを決断できるが、私はブッダではない。もし問題が私自身のみに関することであれば、私は独裁者として行動することができるが、この件に関しては、私は独裁者として行動することはできない。私は20-30年にわたって、あらゆる機会にチベットの高僧、学者、科学者たちに比丘尼戒脈の再興を訴えてきた。私は一貫して比丘尼戒脈の再興を支持してきた。しかし、チベットの学者たちの間には、非常に大きな抵抗が存在していた。その抵抗に特段の理由があったとは思えない。ただ我々はさらに議論する必要がある、そしていっそうの支持を必要としている。チベット仏教には、すでに中国・法蔵部の戒脈から具足戒を受けた尼僧が存在しており、我々はそれらの尼僧を比丘尼として受け入れる。我々にできることは、3つの主要な僧院活動、すなわち *Ṗoṣadha* (*uposatha*; 布薩) (14)、*Varṣa* (*vassa*; 安居) (15)、*Pravāraṇā* (*pavāraṇā*; 自恣) (16)を、法蔵部の戒脈からチベットの戒脈に移し変えることである。チベット（仏教）の比丘尼たちがこれらの修行をすぐにでも実行することを推奨する、と(17)。

このドライ・ラマの発言に対し、壇上に並ぶ比丘・比丘尼たちから、次々と質問がなされた。まず、この問題はサンガが決定することであり、ここにこうして我々がサンガとして存在しているのだから、我々が比丘尼サンガの再興についての決断をすることができるはずだという意見が述べられた。この意見に対し、ドライ・ラマは、次のように応えた。8世紀にチベットに仏教サンガが確立して以来、チベットで布薩・安居・自恣という3つの僧院活動が比丘尼によって行われることはなかった。すでに今年の安居の時期も近いので、早速、（チベット亡命政府のあるインドの）ドラムサラに来て、これらを開始すると良い。比丘たちとは別に、チベット仏教の比丘尼たちだけで、法蔵部の様式に従って、これらの儀礼を行うことができれば素晴らしい、と。また、壇上の比丘尼の一人は、次のように質問し

た。法蔵部の四分律を受戒してチベット仏教の比丘尼になった女性たちは、チベット仏教に伝わる根本説一切有部律を詠唱することになるのか、それとも四分律を詠唱するのか。この質問に対し、ダライ・ラマに代わって、左手後方に控えていたチベット人比丘は次のように答えた。「呪下のご提言は、比丘尼たちが法蔵部の様式に従って儀礼を行うとのことなので、法蔵部の戒脈にある四分律を詠唱するべきである」、と。

一通り質問に答えた後、ダライ・ラマは、予め用意していた声明を弟子の比丘に読み上げさせた⁽¹⁸⁾。弟子が声明を読み上げた後、ダライ・ラマは会議の閉会を促し、退場した。ダライ・ラマによる比丘尼復興の言明を期待していた聴衆がざわめく中、客席中央部のチベット人尼僧の一団からは大きな拍手が巻き起こった。こうしてハンプルク会議は幕を閉じたのであった。

4. ダライ・ラマ声明に対する会議参加者の反応

言うまでもなく、ダライ・ラマに大きな期待を抱いていた会議参加者の間には、この結末に対し困惑が広がっていた。会議に参加していたベトナム人比丘尼の一人は、「ダライ・ラマはなぜチベットの尼僧たちを比丘尼にしてあげないのか」と述べ、涙を流していた。また、別の参加者は、ダライ・ラマが西洋人比丘尼委員会に対し、比丘尼律等に関する調査を命じておきながら、パネル・ディスカッションに登壇する以前に準備していた結論を読み上げさせたことに深い憤りを感じ、不満を述べた。西洋人比丘尼委員会のメンバーの一人は、これまで数十年にわたって比丘尼サンガの復興を求め続け、今回、その機運が最高潮に高まったにもかかわらず、再びその要求が聞き入れられなかったことに深く失望し、これ以上、比丘尼サンガ復興運動を続けることに対して意欲を失ったという。参加者の多くがダライ・ラマの声明に納得がいかない思いを抱えていたにもかかわらず、多くのチベット人の尼僧たちは、ダライ・ラマの決定を支持し、その結論を好意的に受け止めていた。

パネル・ディスカッションから一夜明けた翌朝早く、会議関係者が宿泊していたホテルの部屋に、会議事務局の Dr. Thea Mohr から電話連絡が入った。ダライ・ラマがもう一度会議参加者に会うことを希望しているとの

ことであった。ホテル内の、それ程広くないホールの中に椅子が車座に並べられ、30名ほどの研究発表者がダライ・ラマを囲んで着席し、2時間ほどにわたって、再びダライ・ラマと会議参加者との間に意見交換が行われた。会議の主催者・研究発表者を前に、ダライ・ラマは静かに語りかけた。ダライ・ラマは確かにチベット仏教の最高指導者であるけれども、ダライ・ラマ一人が決定した事柄に、他のサンガのメンバーが従わなければ、サンガの中に亀裂が生じ、深刻な事態が生じてしまう。もし、サンガの主要なメンバーが合意するならば、ダライ・ラマ自身は喜んで比丘尼受戒を実現したいと考えている、と述べた。そしてダライ・ラマは二つの提案を行った。第一に、2007年の12月に、サールナート、ブッダガヤーなど仏教に所縁がある都市あるいはデリーなどのインドの都市において、チベットの主要各派の代表、主要寺院の住職、および仏教国各国の大僧正を招いて、再び比丘尼復興についての会議を行う、第二に、それらの代表が合意すれば、チベット仏教において全面的に比丘尼受戒を行う、と。この会見においても、いくつかの質疑応答が行われ、ダライ・ラマの考えは前日よりもいっそう明確に述べられた。ダライ・ラマの発言を要約すると、四分律と根本説一切有部律にはほとんど違いがなく、その違いはわずかに過ぎないのだから、四分律を受戒した比丘尼たちは、チベット仏教の比丘尼として根本説一切有部律の実践を行えばよい。そして四分律をチベット化するために、四分律を受戒した比丘尼たちは四分律を中国語からチベット語に翻訳し、チベット語で四分律を詠唱するように、とのことであった。ダライ・ラマの表情や言葉の調子からは、比丘尼復興を支持する人々に対する思いやりを感じとることができた。しかし、この会見においても、ダライ・ラマの基本方針は、前日の声明から少しも外れることはなかった。

この会見の後、出席者の間には再び落胆が広がった。ダライ・ラマの退席後、出席者たちは口々に語り合った。「ダライ・ラマが一人で決定できないはずがない。ダライ・ラマが命令を下せば、どれほど比丘尼サンガ復興に反対している比丘でも従わざるを得ないはずだ」「そもそも比丘尼サンガ復興に反対しているチベット各宗派の代表や各国の大僧正が、比丘尼サンガ復興のための会議に参加することすら、ほとんど期待できない」「四分律を受戒した比丘尼たちは、すでに根本説一切有部律を実践し、チベット仏教の比丘尼としての修行を行っているのだから、彼女たちが四分

律をチベット語に翻訳して詠唱することに、一体、何の意味があるというのか。すでにチベット仏教の比丘尼としての宗教生活を送っている彼女たちが、根本説一切有部律の読誦、儀礼参加を認められず、いつまでも四分律受戒にとらわれている限り、チベット・サンガの一員をなす比丘尼として、迎え入れられたことにはならない「この決定は、チベット仏教の中に、法蔵部（四分律）比丘尼という新たなセクトを生み出したようなものだ」「ダライ・ラマは、法蔵部（四分律）比丘尼たちを他のチベット仏教コミュニティと区別し、差別しているのではないか」、と。

しかし、ハンブルク会議の主催者は、会議のウェブサイト「ダライ・ラマがチベット仏教における女性の比丘尼出家導入に対し『全面的支持』を発表した」と掲載し、ダライ・ラマの決定を前向きに受け止める声明を行った⁽¹⁹⁾。

5. 結びにかえて

今回、ダライ・ラマが出した結論を総括すると、ダライ・ラマは、チベット仏教の伝統に即して、女性が根本説一切有部律を受戒し、比丘尼になることを認めなかった。結局、チベット仏教の比丘尼として出家することを望む女性が、チベット仏教のサンガから受戒することはできないのである。また、これまでに法蔵部の四分律を受戒してチベット仏教の比丘尼になった女性たちは、四分律受戒という特色によって、チベット仏教コミュニティの他のメンバーとは区別される存在であることが確認され、彼女たちは四分律を「チベット化」させた実践を行うことを求められた。チベット仏教の中に比丘尼サンガの導入を求める四分律を受戒した女性たちの多くが西洋人であること、またチベット人尼僧の多くが必ずしも比丘尼出家に対して積極的な支持を与えていなかったことを考慮すると、今回のダライ・ラマの結論は、チベット人仏教徒の指導者として、チベット人社会の総意を優先しつつ、西洋人比丘尼たちの熱意にできる限り応えようとしたものとして理解することもできるであろう。

また、四分律を受戒したチベット仏教の比丘尼たちに対する布薩・安居・自恣の提起も、ダライ・ラマの深慮を窺わせるものである。西洋人比丘・比丘尼の中には、長期にわたってアジアの僧院社会に身を置き、修行経験

を重ねた出家者も決して少なくないが、その一方で西洋文化に即した独自の仏教のスタイルを追求する仏教徒も多数存在し、西洋社会に生きる比丘・比丘尼の生活様式は、伝統的なアジアの仏教社会における僧院生活とは必ずしも一致しない⁽²⁰⁾。一般にアジアの仏教社会では、比丘・比丘尼あるいはその他の形態の僧・尼僧として出家すると、少なくとも一定期間、師僧の権威の下で僧院における共同生活を行いながら、出家者としての訓育を受けることが修行の出発点となる。これに対し、西洋社会における仏教修行では、各個人の内的経験が尊重される傾向があり、個人の自律性が高い。ダライ・ラマの提言に従って、四分律を受戒したチベット仏教の比丘尼たちが、一つのサンガがとして布薩・安居・自恣を実践することには、単に出家者としての伝統儀礼を忠実にこなす以上の意味が込められているのかもしれない。1ヶ月に2度の布薩、雨季の3ヶ月間にわたる安居、安居明けの自恣を定期的に行うためには、比丘尼たちは出家者同士の共同生活が不可欠となる。宗教実践を中心とした出家者同士の共同生活があり、師が弟子を受け入れ、訓育していく場が確立してこそ、チベット仏教社会に伝統的に存在してきた比丘サンガと同等の比丘尼サンガの導入であると理解することができよう。

今回のハンブルク会議において筆者は二つの点が気がかった。第一の点は、会議における研究報告および主催者の問題関心が、比丘尼律のテキスト・歴史・受戒式の手続き的方法に集中しており、現代チベット社会における比丘尼復興に対する態度やチベット人尼僧の見解を総括する研究報告が含まれていなかったという点である。タイ仏教における女性について研究している筆者には、亡命チベット人社会の現状についてここで正確に論述することはできない。しかし、会議の合間に意見交換を行った数名のチベット人尼僧の意見を聞く限り、チベット人尼僧および彼女たちの師に当たるチベットの僧侶たちが、女性の比丘尼出家を容認することができる段階に未だ達していないことは推測できる。しかし、仮に、研究者が現在のチベット仏教界における比丘尼出家に関する意見分布について詳細なフィールド調査を行い、その結果、現時点ではチベット人社会において比丘尼出家の実現は極めて困難であるという見通しを示したとしても、社会運動の立場にある人々は、文化人類学等の研究が捉える「現実」に対し、挑戦を試み続けるであろう。

第二に気がかりだった点は、宗教的伝統が継承するヒエラルヒーの問題である。近代という時代の理念は、垂直な社会構造を批判し、水平で対等な個人間関係を理想として、さまざまな社会改革を促してきた。こうした観点から仏教の僧院コミュニティを眺めると、具足戒を備えた男性の比丘の優位と、具足戒を受けられない女性の劣位は、改革すべき不当な現実である。男性と対等な女性の具足戒受戒資格の認定は、一面では、仏教における女性の地位向上・出家機会の保障という積極的な側面を持つ。しかし、アジアの伝統的仏教社会には、ジェンダー間だけでなく、出家者と在家者、師弟関係、出家年数の長い長老と出家して間もない新参出家者など、さまざまな関係の間に地位のヒエラルヒーが存在し、その秩序が尊重されている。理論的には、具足戒を受けた比丘尼は、在家仏教徒や比丘尼としての地位を享受することなく修行を重ねてきた在来の尼僧たちよりも優位に立つ。さらに、比丘尼としての出家年数を重ねるほど、仏教コミュニティにおける彼女たちの地位は高まり、権威は増す。法蔵部の四分律を受戒した西洋人比丘尼たちが、チベットの伝統的サンガの正規のメンバーとして認定されるということは、彼女たちが既存のヒエラルヒー秩序の上位に迎え入れられ、具足戒を受けていない人々がその権威への従属を求められることを意味する。比丘尼たちが認定されるべき地位と権威が高いほど、彼女たちの存在が脅威と受け止められ、容認しがたいと捉えられるのは、当然のこととも言えよう。筆者が知る限り、比丘尼サンガ復興・創設運動は、ジェンダー以外の側面では、伝統的仏教ヒエラルヒーを問題にしておらず、むしろ既存の秩序の温存を前提とし、女性をその上位の地位から排除していることを問題としている。しかし、既存の秩序の中にいる人々にとって問題なのは、「女性」が地位や権力から排除されていることではなく、新たな権力の脅威なのかもしれない。伝統サンガの一部としての比丘尼サンガの復興・創設が、すべての女性およびすべての仏教徒の利益であるためには、ダライ・ラマの苦しい決断に示されていたとおり、より広範な支持が必要であるといえよう。

(神戸大学大学院国際文化学研究科准教授)

謝辞

本稿の執筆に当たって、Shayne Clarke 氏 (McMaster University, Canada) と三宅伸一郎氏 (大谷大学) から貴重なご助言をいただいた。また、会議に参加した際、Shobha Rani Dash 氏 (大谷大学)、Stefania Travagnin 氏 (SOAS, University of London, UK) と行った意見交換は、本稿を執筆する上で大変有益なものであった。四氏に対しここに感謝の意を表したい。

註

- (1) 本会議における研究報告は、筆者の報告も含め、Wisdom Publications から出版される予定である。
- (2) 比丘尼サンガの歴史と戒脈については、以下の研究を参照。[Skilling 1993 : 1994]、[Clarke 2004]。
- (3) [Tsedroen 1988a : 1988b]、[Tsono 1988 : 1995 : 2004]、[Unknown 1988a : 1988b : 1988c] を参照。
- (4) 以下、本稿では Sakyadhita International Association of Buddhist Women を「Sakyadhita 協会」と略称し、Sakyadhita 協会が主催する会議 Sakyadhita International Conference on Buddhist Women を「Sakyadhita 会議」と略称する。Sakyadhita 協会は、1987 年、インドのブッダガヤーにて開催された The First International Congress on Buddhist Nuns (国際仏教尼僧会議) を契機として成立した。[Tsono 1988 : 1999]、[Unknown 1988a] を参照。
- (5) スリランカ上座部仏教における比丘尼サンガの復興は、スリランカ人女性 Ranjani de Silva、Kusuma Devendra らの熱意に支えられて実現したといえる。1996 年、Kusuma Devendra をはじめとする 10 名のスリランカ人女性がインドのサールナートにおいて韓国サンガから具足戒を受けて比丘尼となり、スリランカ上座部仏教における比丘尼サンガ復興の端緒となった。その後、1998 年には、さらに 21 名のスリランカ人女性が、台湾の仏教団体、佛光山主催の国際受戒式で具足戒を受けて比丘尼となり、スリランカの有力比丘 Sumangalo 師の支援などを得て、比丘尼サンガはスリランカ社会に定着するようになった。スリランカでは、2004 年半ばまでに、約 400 名の比丘尼と約 800 名の沙弥尼が誕生している。<http://www.sakyadhita-srilanka.org/history.html> (更新日不明、アクセス日 2007 年 11 月 19 日) を参照。スリランカ上座部仏教の比丘尼サンガ復興については、以下のものを参照。[Bhadra 2001]、[de Silva 2004]、[Devendra 1988]、[Hüsken 2006]、[Li 2000]。
- (6) タイでは、Chatsumarn Kabil Singh (Dhammanandā Bhikkhūnī) をはじめとするタイ人女性が、上座部の比丘尼サンガを復興したスリランカで受戒して比丘尼となり、タイ上座部仏教における比丘尼サンガの復興・導入を訴えている。詳細については、以下の研究を参照。[Kabil Singh 1988 : 1991b]、[Ito 2004a : 2004b : 2006]。
- (7) 2007 年 7 月 20 日午後のダライ・ラマ声明。[Dalai Lama 1988a : 1988b] を参照。
- (8) “Background and objectives” in the website of “The first International Congress on Buddhist Women’s Role in the Sangha, Bhikshuni Vinaya and

- Ordination Lineages” (<http://www.congress-on-buddhist-women.org/index.php?id=3>)、更新日不明、アクセス日 2007 年 8 月 7 日。
- (9) “Conference on Tibetan Buddhism in Europe held in Switzerland August 13-14, 2005” in the website of “World Tibet Network News”, published by the Canada Tibet Committee, 16 August 2005 (http://www.tibet.ca/en/wtnarchive/2005/8/16_1.html)、更新日不明、アクセス日 2007 年 8 月 7 日。
- (10) 西洋人比丘尼委員会のメンバーとその略歴については、次のウェブサイトを参照。“The Committee of Western Bhikkhunis” in the website of “Venerable Thubten Chodron’s Homepage” (http://www.thubtenchodron.org/BuddhistNunsMonasticLife/the_committee_of_western_bhikkhunis.html)、更新日 2006 年 9 月 17 日、アクセス日 2007 年 8 月 7 日。そのメンバーには、ハンブルク会議主催にあたって中心的役割を果たした Bhikkhuni Jampa Tsedroen、Sakyadhita 協会会長の Bhikkhuni Karma Lekshe Tsomo、瞑想の師として国際的な尊敬を集めている Bhikkhuni Tenzin Palmo らが含まれている。
- (11) 例えば、以下の文献を参照。[平川 1998]、[Tsomo 1996]、[Kabilsingh 1991a]。
- (12) 例えば、Jan-Ulrich Sobisch (Tibetology, University of Copenhagen) の報告は、こうした見解を示した報告の一つである。
- (13) 主催者側は、主として 3 つの選択肢を提起した。第一の選択肢は、根本説一切有部律を継承するチベット仏教の比丘（恐らくチベット人比丘を指すものと思われる）と四分律を継承する大乘の比丘尼（恐らく台湾、韓国、ベトナムなどの比丘尼を指すものと思われる）の二つのサンガによって受戒式を行うというもの、第二の選択肢は、比丘尼サンガの関与なしに、根本説一切有部律を継承するチベット仏教の比丘サンガのみによって受戒式を行うというもの、第三の選択肢は、根本説一切有部律を継承するチベット仏教の比丘と四分律を受戒したチベット仏教の比丘尼（チベット人も存在するが、その多くは西洋人である）の二つのサンガによって受戒式を行うというものであった。第一の選択肢では、新たに比丘尼律を受戒する女性は、二つの異なる伝統に属する比丘サンガと比丘尼サンガから受戒することになるので、純粋なチベット仏教の比丘尼として受け入れられない可能性も存在する。また、律の詠唱の際に、チベット語で継承されておりチベット仏教の伝統において耳慣れた根本説一切有部律と、漢文で継承されている四分律がうまくみ合わないといった技術的問題も生じるといえる。第二の選択肢は、比丘尼出家の手続きにおいて比丘サンガと比丘尼サンガの双方の関与を定めた律の規定から逸脱することにはなるが、純然たるチベット・サンガの一員として比丘尼が迎え入れられるといえる。ハンブルク会議の開催に当たった西洋人比丘尼委員会のメンバーの一人からは、第三の選択肢を推奨する発言もなされた。
- (14) 新月・満月の日に、比丘・比丘尼が律を詠唱し、律に反する行いを告白・反省すること。
- (15) 約 3 ヶ月にわたる雨季の期間、比丘・比丘尼が外出を避け、一箇所の僧院に定住し、集団で修行に専念すること。
- (16) 安居の最終日に比丘・比丘尼が集まり、安居中に犯した律の違反を告白・反

省すること。

- (17) このダライ・ラマの発言は、パネル・ディスカッションを録画した DVD (“Panel Discussion: H. H. the Dalai Lama and others”, Friday, July 20, 2007 [1.30-4.00 p.m.], First International Congress on Buddhist Women’s Role in the Sangha, Auditorium Netzwerk 製作・販売) に収録されている。
- (18) このとき、ダライ・ラマの弟子が読み上げた声明は、会議後に報道陣向けに公開され、その後、ハンブルク会議のウェブサイトにも掲載された。“Statement of His Holiness the Dalai Lama on Bhikkhuni Ordination in the Tibetan Tradition,” in the website of “The first International Congress on Buddhist Women’s Role in the Sangha, Bhikshuni Vinaya and Ordination Lineages” (<http://www.congress-on-buddhist-women.org/index.php?id=142>)、更新日不明、アクセス日 2007 年 7 月 31 日。声明の最後の一文は、原文の英語では次のように述べられている。“One thing we could do is to translate the three primary monastic activities (Poṣadha, Varṣa, Pravāraṇā) from the Dharmagupta[ka] lineage into Tibetan and encourage the Tibetan Bhikshunis [Bhikṣuṇīs] to do these practices as a Bhikshuni Sangha [Bhikṣuṇī Saṅgha].”
- (19) “Press Release: Dalai Lama Announces ‘Full Support’ for Introduction of Full Ordination for Women in Tibetan Buddhism”, in the website of “The first International Congress on Buddhist Women’s Role in the Sangha, Bhikshuni Vinaya and Ordination Lineages” (<http://www.congress-on-buddhist-women.org/index.php?id=143>)、更新日不明、アクセス日 2007 年 7 月 31 日。
- (20) 例えば、以下の論文を参照。[Shneiderman 1999]、[Gross 1999]。

参考文献

- Bhadra, Bhikkhuni 2001 *Higher Ordination and Bhikkhuni Order in Sri Lanka*. Sridevi.
- Clarke, Shayne 2004 “*Vinaya Mātrkā* – Mother or the Monastic Codes, or Just Another Set of Lists? A Response to Frauwallner’s Handling of the Mahāsāṃghika *Vinaya*.” *Indo-Iranian Journal* 47 : 77-120.
- Dalai Lama, His Holiness the 1988a “An Interview with His Holiness the Dalai Lama.” in Tsomo, Karma Lekshe (ed.), *Sakyadhita: Daughters of the Buddha*. Sri Satguru Publications, 267-276.
- Dalai Lama, His Holiness the 1988b “Opening Speech of His Holiness the Dalai Lama.” in Tsomo, Karma Lekshe (ed.), *Sakyadhita: Daughters of the Buddha*. Sri Satguru Publications, 39-46.
- de Silva, Ranjani 2004 “Reclaiming the Robe: Reviving the Bhikkhunī Order in Sri Lanka” in Tsomo, Karma Lekshe (ed.), *Buddhist Women and Social Justice: Ideals, Challenges, and Achievements*. State University of New York Press, 119-135.
- Devendra, Kusuma 1988 “Establishment of the Order of Buddhist Nuns and its Development in Sri Lanka.” in Tsomo, Karma Lekshe (ed.), *Sakyadhita: Daughters of the Buddha*. Sri Satguru Publications, 258-266.

- Gross, Rita M. 1999 "Feminism, Lay Buddhism, and the Future of Buddhism." in Tsomo, Karma Lekshe (ed.), *Buddhist Women across Cultures: Realizations*. State University of New York Press, 277-289.
- Hüsken, Ute 2006 "'Gotami, Do Not Wish to Go from Home to Homelessness!': Patterns of Objections to Female Asceticism in Theravada Buddhism." in Freiberger, Oliver (ed.), *Asceticism and Its Critics: Historical Accounts and Comparative Perspectives*. Oxford University Press, 211-233.
- Ito, Tomomi 2004a "New Beginnings: The Bhikkhuni Movement in Contemporary Thailand." in Tsomo, Karma Lekshe (ed.), *Bridging Worlds: Buddhist Women's Voices Across Generations*. Yuan Chuan Press, 120-124.
- Ito, Tomomi 2004b "Women's Rights, Ordination and *Dhamma* Practice: A Reflection on Recent Movements of Thai Buddhist Women." *WFB Review* 41(1) : 59-63.
- Ito, Tomomi 2006 "Ordained Women in Yellow Robes: An Unfamiliar 'Tradition' in Contemporary Thailand." in Tsomo, Karma Lekshe (ed.), *Out of the Shadows: Socially Engaged Buddhist Women*. Sri Satguru Publications, 168-171.
- Kabilsingh, Chatsumarn 1988 "The Role of Women in Buddhism." in Tsomo, Karma Lekshe (ed.), *Sakyadhita: Daughters of the Buddha*. Sri Satguru Publications, 225-235.
- Kabilsingh, Chatsumarn 1991a *The Bhikkhuni Pātimokkha of the Six Schools*. Thammasat University Press.
- Kabilsingh, Chatsumarn 1991b *Thai Women in Buddhism*. Parallax Press.
- Li, Yuchen 2000 "Ordination, Legitimacy, and Sisterhood: The International Full Ordination Ceremony in Bodhgaya." in Tsomo, Karma Lekshe (ed.), *Innovative Buddhist Women: Swimming Against the Stream*. Curzon, 168-198.
- Shneiderman, Sara 1999 "Appropriate Treasure?: Reflections on Women, Buddhism, and Cross-Cultural Exchanges." in Tsomo, Karma Lekshe (ed.), *Buddhist Women Across Cultures: Realizations*. State University of New York Press, 221-238.
- Skilling, Peter 1993 "A Note on the History of the *Bhikkhuni-saṅgha* (I): Nuns at the Time of the Buddha." *W.F.B Review* 30(4) : 47-55.
- Skilling, Peter 1994 "A Note on the History of the *Bhikkhuni-saṅgha* (II): The Order of Nuns after the *Parinirvāna*." *W.F.B Review* 31(1) : 29-49.
- Sobisch, Jan-Ulrich 2007 "*Bhikṣuṇī* ordination: lineages and procedures as instruments of power." in Proceedings for the First International Congress on Buddhist Women's Role in the Sangha: Bhikshuni Vinaya and Ordination Lineages with H. H. the Dalai Lama (unpublished binding).
- Tsedroen, Jampa 1988a "Living by the Vinaya in the West." in Tsomo, Karma Lekshe (ed.), *Sakyadhita: Daughters of the Buddha*. Sri Satguru Publications, 202-213.
- Tsedroen, Jampa 1988b "The Significance of the Conference." in Tsomo, Karma

Lekshe (ed.), *Sakyadhita: Daughters of the Buddha*. Sri Satguru Publications, 47-52.

Tsomo, Karma Lekshe 1988 “Prospects for an International Bhiksuni Sangha.” in Tsomo, Karma Lekshe (ed.), *Sakyadhita: Daughters of the Buddha*. Sri Satguru Publications, 236-257.

Tsomo, Karma Lekshe 1995 *Buddhism through American Women's Eyes*. Snow Lion Publications.

Tsomo, Karma Lekshe 1996 *Sisters in Solitude: Two Traditions of Buddhist Monastic Ethics for Women*. State University of New York Press.

Tsomo, Karma Lekshe 1999 “Mahāprajāpatī's Legacy: The Buddhist Women's Movement: An Introduction.” in Tsomo, Karma Lekshe (ed.), *Buddhist Women Across Cultures: Realizations*. State University of New York Press, 1-44.

Tsomo, Karma Lekshe 2004 “Introduction. Family, Monastery, and Gender Justice: Reenvisioning Buddhist Institutions.” in Tsomo, Karma Lekshe (ed.), *Buddhist Women and Social Justice: Ideals, Challenges, and Achievements*. State University of New York Press, 1-19.

Unknown 1988a “Introduction.” in Tsomo, Karma Lekshe (ed.), *Sakyadhita: Daughters of the Buddha*. Sri Satguru Publications, 17-30.

Unknown 1988b “Ordination as a Buddhist Nun.” in Tsomo, Karma Lekshe (ed.), *Sakyadhita: Daughters of the Buddha*. Sri Satguru Publications, 53-65.

Unknown 1988c “The Bhikṣuṇī Issue.” in Tsomo, Karma Lekshe (ed.), *Sakyadhita: Daughters of the Buddha*. Sri Satguru Publications, 215-224.

平川彰 1998『比丘尼律の研究』(平川彰著作集第13巻)春秋社。

参考 DVD

“Panel Discussion: H. H. the Dalai Lama and others”. Friday, July 20, 2007 [1.30-4.00 p.m.], First International Congress on Buddhist Women's Role in the Sangha, Auditorium Netzwerk 製作・販売。

参考ウェブサイト

“Background and objectives” in the website of “The first International Congress on Buddhist Women's Role in the Sangha, Bhikkhuni Vinaya and Ordination Lineages”

(<http://www.congress-on-buddhist-women.org/index.php?id=3>) 更新日不明、アクセス日 2007年8月7日。

“The Committee of Western Bhikkhunis” in the website of “Venerable Thubten Chodron's Homepage”

(http://www.thubtenchodron.org/BuddhistNunsMonasticLife/the_committee_of_western_bhikkhunis.html) 更新日 2006年9月17日、アクセス日 2007年8月7日。

“Conference on Tibetan Buddhism in Europe held in Switzerland August

13-14, 2005” in the website of “World Tibet Network News”, published by the Canada Tibet Committee, 16 August 2005

(http://www.tibet.ca/en/wtnarchive/2005/8/16_1.html) 更新日不明、アクセス日 2007 年 8 月 7 日。

“Press Release: Dalai Lama Announces ‘Full Support’ for Introduction of Full Ordination for Women in Tibetan Buddhism”, in the website of “The first International Congress on Buddhist Women’s Role in the Sangha, Bhikshuni Vinaya and Ordination Lineages”

(<http://www.congress-on-buddhist-women.org/index.php?id=143>) 更新日不明、アクセス日 2007 年 7 月 31 日。

“Sakyadhita Sri Lanka: History”

(<http://www.sakyadhita-srilanka.org/history.html>) 更新日不明、アクセス日 2007 年 11 月 19 日。

“Statement of His Holiness the Dalai Lama on Bhikkhuni Ordination in the Tibetan Tradition”, in the website of “The first International Congress on Buddhist Women’s Role in the Sangha, Bhikshuni Vinaya and Ordination Lineages”

(<http://www.congress-on-buddhist-women.org/index.php?id=142>) 更新日不明、アクセス日 2007 年 7 月 31 日。